

概要

日本語指導支援の一環として明海大学外国語学部日本語学科の学生が東京都立南葛飾高等学校で在京外国人生徒等に日本語指導支援を行った。日本語教員を目指す学生が日本語指導支援を通して「教える側」の教員としての実践経験をえられる貴重な学び場となった。実習生群(n=2)と非実習生群(n=2)の間では、N3・N4の文型の説明の際に、動詞の述部に使用する文末表現の使用に差が見られた。実習生群はコトガラを描叙、認識を判断するのに対し、非実習生群では意図を最終的に伝達する動きが見られた。

I. はじめに

- 近年、小・中・高校に所属する外国人児童生徒等が増加している。それに伴い、日本語指導の必要性も増し、DLAによる日本語能力の判別や、「JSLカリキュラム」による日本語指導が必要とされている。(文部科学省2016)
- 日本語指導の必要性に伴い、日本語の指導を行う外国人児童生徒等教育に携わる教員の養成・研修モデル・プログラムの開発・普及が教育支援の充実方策として提言されている。(文部科学省2016)
- 言語は受容能力と産出能力とに分かれるが、特に後者の日本語指導にあたっては日本語の文法・文型を5W1H、すなわち、だれが、いつ、どこで、なにを、なぜ、どのように使用するかを正確に指導し、外国人児童生徒が産出できるようサポートする必要があると思われる。

II. 目的

- そこで、本稿では以下のことを目的としている。
- 教室談話の説明を行う場面で、実習生と非実習生の説明のし方の違いを明らかにする。

III. 研究課題

- 課題(1)説明場面において実習生群と非実習生群の間では、文末表現の使用に差が見られるか。
- 課題(2)説明場面において実習生が登壇実習を終えたの前後では、文末表現の使用に変化が見られるか。

IV. 手続き及び分析方法

IV-1. 手続き

- 調査期間は2020年4月から2021年3月である。
- 対象者は、N3・N4の文型を指導する実習生(日本語指導支援経験なし、本大学3年生の登壇実習生)と非実習生(日本語指導支援経験あり、本大学4年生及び本大学大学院生)の学生である。日本語指導支援のレコーディングの件を説明し、授業のレコーディングの許諾を受けている。
- 教室会話における実習生と非実習生の発話数は、日本語の階層構造を(図1南1993, 峯2015)使用した。文末表現として動詞と動詞以外の表現が現れた場合に、規範的な発話としてカウントした。重複した教室談話は使用頻度1としてカウントした。
- 本稿で使用する会話データは、N3・N4の文型を説明する教室談話であり、N3・N4の文型の指導である。分析の対象はスキットの提示・説明、文型の明示的提示、文法の明示的説明(接続)、文型の意味・機能の明示的説明、語用の明示的説明、練習問題での教室談話を使用し、分析した。

IV-2. 分析方法

- 実習生と非実習生が使用したを文末表現を日本語の階層構造(南1993, 峯2015)を使用し、A類、B類、C類、D類に分類した。

動詞	述部							
	(サ)レル	(ラ)レル	ナイ	タ・ダ	ウ・ヨウ	ワカノ	ヨ	ナネ
				マイ			ゾ・ゼ	
	A類		B類			C類		D類

図1：日本語の階層構造(南1993, 峯2015を参考に筆者が作成)

V. 結果

V-1. 両群にみる文末使用の差

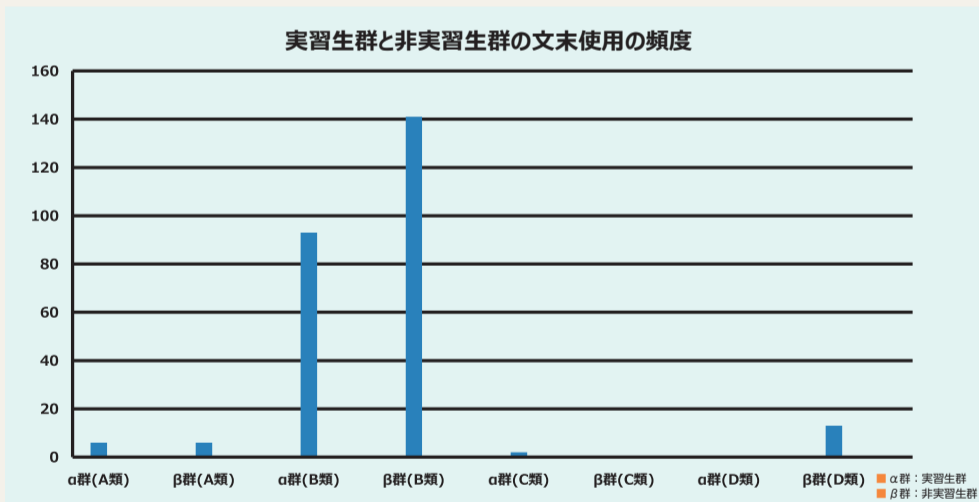


図2：両群の文末表現の使用の頻度

	A類**		B類**		C類**		D類*	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
α群	3	1.41	46.5	36.07	1	1.41	0	0
β群	3	1.41	70.5	10.61	0	0	6.5	0.71
	発話数**		IRE/IRF**					
	平均	SD	平均	SD				
α群	207	4.24	27.5	13.42	P<.05*			
β群	195.5	14.83	31	15.56	P>.05**			

● 説明場面にみる文末表現の使用頻度

実習生群と非実習生群の説明場面におけるA類、B類、C類、D類の文末の使用頻度の比較では、D類のみにおいて使用に差が(p<.05)見られた。

非実習生群ではD類を場面説明、意味説明、語用説明、問題説明などに使用し、聞き手のスキーマの活性化を図ったり聞き手に対し、最終的に意図を伝達する動きがある一方、実習生群では意図の伝達をする動きが見られていない。

● 発話数と質問数の頻度

実習生群に比べ、非実習生群のほうが質問数が少なく、発話数が多い傾向が見られた。しかしながら、実習生群と非実習生群の発話数と質問数には有意な差が(p>.05)確認されていない。

V-2. 実習前後にみる文末使用の変化

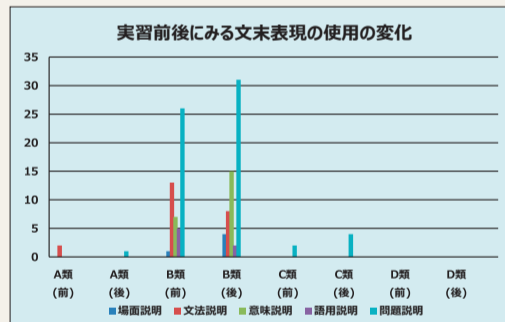


図3：実習前後にみる文末使用の変化

実習前に比べ、実習後では説明場面においてB類の文末表現の使用が増えている。しかしながら、有意な差は示しておらず(p>.05)、D類の発話は見られなかった。

B類の文末表現の使用は、場面、文法、意味・機能、語用、問題説明などの説明に見られた。一方、A類とC類の発話は限られたところにしか現れていない。

	平均	SD
実習前	10.4	12
実習後	9.74	11.73

P>.05

VI. 考察

● 意図の伝達を意識する

非実習生群の説明場面にみる文末表現の使用から、非実習生群は文型の指導の際、聞き手のスキーマの活性化や意図を最終的に聞き手に伝達する動きが見られた。非実習生群では文法・文型の指導にあたって教案作成を行う際、だれが、いつ、どこで、何を、なぜ、どのように使用するかを、伝達することを意識しているため、場面設定や語用説明などでD類の発話が見られたと思われる。

● 模擬授業の必要性

実習を終えた後も実習生が使用するA類、B類、C類、D類の文末表現に有意な差はなかった。初めて登壇実習をするにあたり、緊張の度合いが関与し、教案に頼ったあまり、文型の説明の際にB類(判断)のみが使用されたものと思われる。

VII. 今後の課題

実習生群と非実習生群の数を増やしつつ、大学教員及び勤続年数が十分ある教員の教室談話をレコーディングし、非実習生群と比較を行い、教室発話の発言にみる文末使用の類似度を分析することが課題である。

教室談話において緊張の度合いが、説明をする際に文末表現に与える使用頻度の関与度を明らかにすることが課題である。次に、両群の述部以外にみる日本語階層構造の使用上の違いを明らかにすることが課題である。